

---

# ソードアート・オンライン 或る短剣使いの話

神崎直人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソードアート・オンライン 或る短剣使いの話

### 【Nコード】

N4866Z

### 【作者名】

神崎直人

### 【あらすじ】

デスクゲーム《ソードアート・オンライン》にとらわれた主人公オータムがいろいろな経験を通していく物語。  
彼は生き残るために敵を払っていく…。

## episode 1 生きるために敵を払う

(そろそろ、今日は切り上げようかな?)

アイテム<sup>ストレージ</sup>を見ながらそろそろ規定重量ぎりぎりだし帰ろうかなー、と思う。

ここはVRMMO、というよりデスゲームと化したゲーム、《ソードアート・オンライン》。

舞台となるのは狂気の天才《茅場明彦》が心血を注いで生み出した、百層からなる巨大な石と鉄の城：《アインクラッド》。とても大きな世界、同時にそれだけしか移動できない閉じられた世界でもある。今いるのはその巨大な城の第二十層、『コボルドの巣』という名のフィールドダンジョン(上の層へとつながる迷宮区とはまた違う) 巣というだけあってわいてくるのは人を小さくして知能落としたらこんなものなるんだろー、とおもえる怪物。

そいつらはだいたい五体ぐらいで湧いて出てきて、素手の奴もいれば棍棒とかを持っている(如何せん小さいため対して怖くない) 奴が突っ込んでくる。焦らなければどうとでも対処できる。

そして、ここは別に効率的に経験値を稼いでレベルアップができる、いわゆる《レベル上げ(ファームिंग) スポット》ではない。僕みたいに一人でMobを狩る奴、いわゆるソロプレイヤーの利点は、多人数より大幅に経験値とドロップ品を取ることができる事。《レベル上げスポット》でなら余計にだ。

じゃあ、なんで《レベル上げスポット》に行かないのかというと…

「まずは生きることだよな。」

正直生きていけたら僕としては文句がないからだ。

「…！」

帰ろうとしていたところにまたMobが湧いてきた。敵は正面に三匹。素手、棍棒、素手の装備。

これなら一気にいけるだろう、そう思い僕は突っ込んだ。

「ぎゃぎゃ…！」

耳障りな鳴き声とともに一匹が突っ込んでくる。冷静に敵を見て走りながら片手用短剣のソードスキルを発動させる。《ムーブ・スラスト》、単発突進攻撃…を小柄な体に叩きこむ。コボルトは一瞬不自然な形で止まるとその体をポリゴンえと四散させた。後二匹が同時に突っ込んでくるが、今度は《投剣》スキル、腰にある二本の投げナイフを両手で別々の目標に放つ《マルチショット》を発動。高速で目標に飛んだナイフは狙い違わず二つの小さな体に突き刺さった、相手の体勢が同時に崩れる。

そのまま棍棒を持つ方を間合いに捕らえ、三回連続突き《サーズ・スラスト》で仕留める。

その後、もう一匹を体術スキル、単発貫手《エンブレイサ》で仕留めた。

episode 1 生きるために敵を払う（後書き）

ストックが切れるまで毎日0時投稿です

感想、誤字脱字指摘をよろしく願います

episode 1 生きるために敵を払う2

「…ん、なんで戻るタイミングでこいつがいるの？」

転移結晶…一瞬で目的の町に戻る便利な結晶…をもつたいないので使わず、歩いてもと来た道をたどっていた僕の目の前に現れたのは革鎧に身を包んだ通常より少し大きいコボルト《コボルトウォーリアー》。対処できないわけではないが、なかなか耐久と防御が高く正直な話めんどくさいなあという奴だ。

「…ん？ここまで来るまでに倒してないしなあ。」

何かの条件があるのだろうか、とか思っていると、どうやらこっちに気付いてしまったようだ。

「ガアアアア！…！！！！！」

「うるさいな。」

そう吠えるんじゃない。耳がキーンってなるんだよね、これ。あんまり好きじゃない。

コボルトウォーリアーは完璧にこちらを捕らえ、飛びかかってきたジャンプ攻撃、と思う暇もなく僕はそこから飛びのいた。ガツシャアアン！！…と大きい音がたった。すごい威力だな。

「当たるとまずいよね。さてどうやるのか？」  
「グルウ。」

あ、よく見たら目が赤く光ってる。怖いねえ。

僕は素早い動作で腰から投げナイフを抜き《投剣》スキル、基礎中の基礎、《シングルショット》を発動させる。地道に上げてきたスキルと自分のパラメーターが作用してか、かなり速く飛んで行ったそれは、何となく見ていた赤く光る目に直撃した。

「ガアアアア!?!?!?!?!」

「お?弱点だったりしたかな?大発見。」

みれば相手のHPバーがかなり減少している。どうやら本当に弱点のようだ。

悶えているコボルトウォリアーにもう一発ナイフが刺さってない方を狙って《シングルショット》を発動、もう一つの目に直撃するように投げる。そしてまたも命中。

「グ、ガアアア!?!?!?!」

「ああ、なんかごめんね?」

相手のHPは大方消し飛んだわけだが、目に二つのナイフが刺さっているのはどうも猟奇的で頂けない。早く終わらせてやるか、と僕は悶えるコボルトウォリアーに突進し片手用短剣のソードスキル《サーズ・スラスト》を発動しようど心臓の位置にあるクリティカルポイントに三発の連続突きを叩きこみ、相手の体を四散させた。

「ん、これははやくかえったほうがいいね。」

もう一回出ても困るし…。目にナイフ投げるのももういやだしね。

## episode 1 黒の剣士

「おお、誰かと思ったたらキリトではないか。」

「おお、オータムか？今日は何処にいたんだ？」

「んー？コボルトの巣で適当に狩ってたよ。」

目の前にいる奴の名前はキリト。ロングソード片手用直剣使い。

いつもと変わらず革鎧も着けず、盾も持たないその男はなかなかどうして迫力がある。

とか思っていると、目の前のキリトが呆れたようにつぶやいた。

「あそこ別にレベル上げに向いてるわけじゃないだろ？」

「うん〜。でも今日は珍しい収穫があったんだ。」

「え？あそこで珍しいドロップ品なんか出たっけ？」

「いや、ちがうよ。コボルトウォーリアーの弱点がわかったんだ。」

その情報を教えてやると、ちょっと感心した後苦笑しながらそんな情報誰もいらさないだろう、とぼやいた。

「そつだね。」

「…相変わらず変な奴だな？飯を食べに行こうぜ、この辺でうまい店あんまりないけど。」

「キリトは変わらないね。お腹空いたしお供するよ？」

途中でキリトと僕のドロップ品を換金してから…コボルトウォーリアーの目玉がどうやら珍しかったらしく、高く買い取ってもらえた…近くにある酒場兼宿の中に入り席を取ってそこで食べることにし



た。  
ものすごいスピードで注文を取りに来るNPCに適当に注文し、またまたものすごいスピードで目の前に料理が並んだ。並んだ料理のパンを手にとって食べている僕はキリトがなぜか眉をしかめていたため、どうしたの？と問いかけた。すると。

「…どう考えてもあんな眼玉を何に使うのかわからん。」

「あはは。それは僕にもわからないな？何に使うんだろ？」

「…考えても仕方ないか、さっさと食おう。」

「いただきます。」

いや、お前もう食べ始めてるじゃんとかキリトが行ってきたが、とりあえずスルー。

いただきますは言わないとだめだよ？と僕が言うと

「いただきます…。」

「お。ちゃんと言えたねえらいえらい。」

「殴るぞ。」

「ごめん。調子に乗ったかな？」

ま、いいけどよ。というとキリトはパンを食べ始めた。

その後数分間食事に徹して、途中でキリトが口を開いた。

「なあ、明日一緒に潜らないか？」

「めずらしいね？」

キリトはあまり人とかかわるのが得意でなく、しかもビーターテスターのため他の人とも溝が深い。

誘ってくれるのはとっても嬉しいけど、疑問が残ってしまう。

「いや、さ、オータムの戦い方一回も見てないなーって思ってさ。」  
「そういえば…、確かにそうだね？一回も一緒に戦った事ってないんだね。」

「よく考えたら、いつから知り合いだったのかも覚えてないしな。」

こちらもぼんやりとしか覚えていないが、第十層の主街区のあたりであつたはずだ。

まあいつ知り合いになって、友達になつたかなんて覚えてなくても不思議じゃないよね？

「ん。知り合いつて言い方は寂しいなあ？こちらとしてはもう友達のつもりだよ？」

「…ああ。悪いな、友達…だな。」

その後食事を終えて、明日は朝、少し遅めの十時ごろ、一層上の二十一层で狩りをしようという事になった。

## episode 1 黒の剣士2

ここは朝十時、第二十一層の転移門前。

キリトとの待ち合わせ場所だ。

僕の装いは、ゆったりとした薄緑の外套に、同じような色のズボン、またまた同じような色のハーフフィンガーグローブ。腰にあるのは左側に計6本からなる投げナイフの束と右側に愛用の片手用短剣、《バリユート》。

鎧類は外套の中に来ている革鎧。後は革のブーツ。

武装の確認をしていると、転移門が光って一人の男が出てきた。いつも通り黒い装い、キリトだ。眠そうにあくびをしている。

「おはよう。よく眠れた〜?」

「ふああああ…。おはよう。」

「よく眠れたんだね…。」

今だ眠そうに眼をこすっているキリトは朝が弱いのか。

「で、今日はどこ行くのかな?」

「…結構経験知ももらえるクエストがあつてな。構わないか?」

「いいよ。」

別にどこでも余裕があるならついて行くよ。

とある老人からクエストを受けた後：フィールドダンジョンに斧を落としたらしい、なぜ気がつかないのか？：森を中心としたフィールドダンジョンに入った。結構入り組んでいて仲間と逸れたり、迷ったりしたらよろしくなさそう。

「ここでいいんだよね？」

「こここの、最奥部。でかい木のあたりに落したんだと。…なんで気が付かない？」

どうやらキリトも同じことを思ったらしい。ほんとうにどうなってるんだろつか？

などと心底どうでもいい疑問を持っていると、Mobがわいてきた。

「きたきた。」

「んー。気持ち悪いね。」

目の前にいたのは第一層にいた食人花に似た怪物しかも二匹。頭、もとい花から避けるように開いた口とそこから垂れてくる汚らしい緑のよだれ。本当にやめてほしい。

キリトは剣を抜くと右半身を前に出し腰を落として剣をだらりと下げた。気負いのない構えだが何となく隙のなさそうな構えでもある。僕の構え方は、左半身を前に出し、右手に持つ短剣を純手で持ちかまえるようにしている。

「じゃあ、いつてみましょう。」

「おう！」

横のキリトが颯爽と花？に突っ込む。花形怪物の脚、と思える部分から伸びた根のようなものがキリトに襲いかかる。キリトはそれを

危なげなくかわすと、下から跳ね上げるようにして剣を動かす。そして、茎についている白い球のようなものを切り裂く。さすがだな。

「さぼってたらいけないよね？」

左側の投げナイフの束から二本引きぬいて指にはさむようにして構える。《投剣》スキル、《ツインショット》を弱点である白い球のようなものに向かって放つ。狙い違わず命中したそれは相手の体を大きく怯ませた。

「…近づきたくないな？」

「さぼってないでさっさとやれ！」

「じゅん。」

ぼやいたところでキリトから怒声が飛んできたためだまって仕事をすることにする。

一気に間合いを詰めようとしたところ、花？が何か粘液のようなものを飛ばしてきた。

身を低くして突っ込むことでよける。汚いな。

「…！」

無言の気合とともに片手用短剣ソードスキル、《ムーブ・スラスト》を発動投げナイフが突き刺さっている白い球のようなものに叩き込む。クリティカルで入ったその一撃は残りのHPを消し飛ばした。やっぱり接近戦はやりたくないな。

「気持ち悪いー！」

「乙女か貴様は！いや、気持ち悪いとはおれも思っけどよ。」

「いくら経験値がいいからってここはないよ。そして僕は男ですよ？」

「わかつとる！悪かったな。」

今どこ？と聞くとキリトは、全体の一割も進んでないとぼやきながら答えた。

先は長そう…。いやだな…。

余談だがこのゲームで手鏡というアイテムを除いたものはほとんどリアルと同じ顔になる。

あの時に男女比が大きく変わったのは冷や汗をかいた。もちろん、男性比が増えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4866z/>

---

ソードアート・オンライン 或る短剣使いの話

2011年12月20日00時54分発行